




論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	新井 秀宜
論文担当者	主査 北岡 志保 
	副査 新崎 信一郎 
	副査 木村 卓 
学位論文名	Association between Acid-Suppressive Drugs and Clinical Outcomes in Patients with Nonvalvular Atrial Fibrillation (非弁膜症性心房細動患者における制酸薬と臨床的アウトカムの 関連性)
<p style="text-align: center;">論文審査の結果の要旨</p> <p>経口抗凝固薬 (oral anticoagulants: OACs) 内服中の非弁膜症性心房細動 (nonvalvular atrial fibrillation: NVAF) 患者に制酸薬 (acid-suppressive drugs: ASDs) がよく処方されるが、OACs 内服中の NVAF 患者に対する ASDs 処方のベネフィットとリスクのバランスは未だに不明である。本研究では、OACs 内服中の NVAF 患者における ASDs と臨床的アウトカムの関連を検証した。</p> <p>本研究は日本国内 71 施設のレジストリ研究のサブ解析であった。ビタミン K 拮抗薬内服中の NVAF 患者を対象に設定し、そのうち機械心臓弁の患者、肺血栓症や深部静脈血栓症の既往を有する患者を除外した。2013～2017 年まで患者を追跡した。一次アウトカムとして虚血性イベント、大出血、全死亡、二次アウトカムとして脳梗塞、急性心筋梗塞、出血性脳梗塞を設定した。</p> <p>7826 人 (平均年齢 73 歳) の対象者のうち、ASDs 群は 44%であった。ASDs 群は No ASDs 群より有意に高齢で、高血圧、末梢動脈疾患、冠動脈疾患、脳卒中、慢性閉塞性肺疾患、心不全、大出血の罹患率が有意に高く、アスピリン、クロピドグレルまたはプラスグレル、チクロピジン、スタチン、β-ブロッカー、アンジオテンシン変換酵素阻害薬またはアンジオテンシン II 受容体拮抗薬、非ステロイド性抗炎症薬の処方が有意に多かった。ビタミン K 拮抗薬から直接作用型経口抗凝固薬への変更は、両群で有意差はなかった。No ASDs 群と比較した ASDs 群の虚血性イベント、大出血、全死亡、脳梗塞、急性心筋梗塞、出血性脳梗塞に関する調整後ハザード比はそれぞれ 0.998、0.98、1.22、0.96、0.82、1.17 であった。OACs 内服中の NVAF 患者において、ASDs は虚血性イベントと大出血に有意に関連していなかったが、全死亡と有意に関連していた。</p> <p>以上の結果から、臨床医は ASDs のベネフィットとリスクを慎重に検討し、ASDs の適応が明確な NVAF の患者に対してのみ ASDs を処方するべきであると考えられる。この研究は後ろ向きコホートではあるものの、NVAF 患者に対する ASDs の処方に警鐘を鳴らす重要な研究であることから、学位授与に値すると判断した。</p>	